造園学への二、三の考察

渡 辺 達 三*

Studies on Landscape Architecture

Satomi WATANABE

摘要：本研究では、建築、土木を念頭におきながら、それらとの比較における造園学の特質・性格、独自性を抽出し、フィジカルな空間の計画設計・構成施工に係わる分野における造園学の占める位置づけを明らかにし、そこから、現状の活動内容を説明すると考えられる造園学の定義づけを試み、学を大きく規定していると考えられる“自然性”“機能性”“快適性”の諸契機の意義内容について考察した。

1. はじめに

今日、造園の学術領域は広範多岐にわたり、他分野との競合も随所でみられるようになっていく。このような造園学それ自体、およびそれをとりまく環境の変化の激しい現下の情勢にあって、造園学が生き残り、さらに、いっそうの発展・拡充を遂げていくためには、造園の存在根拠、成立理由といった学術の存立にかかわる原点の問題にまで立ち返り反省し、そこから、今日のおよび将来的な課題を見出し、位置づけ、認識し、予測していくことが必要になってきているものと考えられる。

そこで、本稿では、現状における妥当な造園学術像を把握すべく、1)フィジカルな空間の計画・設計および構成・施工分野における代表的な学術である建築、土木との比較における造園の特質・性格をみつ、造園学の占める位置づけを明らかにし、そこから、2)現状における活動内容を体系的に説明するものとしての造園の定義づけを試み、そして、その定義を敷衍し、さらに学術の構造的な理解・把握に資する目的をもって、3)造園学を大きく規定していると考えられる“自然性”“機能性”“快適性”の3つの契機の意義内容について考察しようとするものである。

2. 建築、土木と造園

2-1 建築と造園

建築は寒暑や風雨など人間の生活上における自然の不都合な要因からの身を守るためのシェルターとしての家をつくり、また、神を祀り、祖先を葬るための記念物をつくることから出発した。神や祖先を祀る記念物には、

その絶対性・永遠性の表象にたえる耐久性や、記念性表出のための象徴性など精神に係わるものの発現が求められ、建築は物質的のみならず、精神的な要求に応えるものとしても発展していくことになる。そして、文明が進み、階層差が生じるようになると、一般建築においても、規模や材料・構築法、装飾などの点で、その所有者や関係者の権威や財力・社会的地位、さらには、その生き方の哲学や理想、文化の推進者としての矜持や意欲といったものを目に見える形で表現していくものとしての機能をも担うようになっていく。もちろん、実用としての建築においても、いっそうの発展を遂げていくものであることはいうまでもない。こうして、建築においては、建築内部における実用のための空間形成、および、その外観による精神的なものの表出ということが主たる目的となっている。なお、外観には、その内部空間の機能や性格などを表示するという重要な意義も有している。

ところで、建築では、その立地する場所は、当該建築物にとっての機能上、景観上その他における“環境”，または、それによってその影響・支配下におかれるべき“領域”となる。“環境”の場合には、建築は、当該環境に調和的、対比的等、様々な形で関わることになるが、そこに外部空間を積極的・能動的に形成させようとするモメントは起こらない。なお、建築が強く自己主張するとき、環境に対して対比的となり、そのような建築物の林立により、その効果が減殺されるばかりか、景観の混乱の招来されることも少なくない。

“領域”の場合には、建築は、その立地する一帯の地域を、機能上、景観上等等において、その影響・支配下

* 東京大学農学部

におくことにより、そこに統一ある外部空間を形成させることになる。このような目的のため、建築物が設置される例も少くない。そこでは、建築による外部空間の形成・構成が図られることになる。しかし、それは、建築主導によって、そのような効果が期待できる場合に限られることになる。しかも、そのような建築が行なわれるとき、それは、例えば観光施設、公園施設など観光計画、公園計画の一環等として、建築の範疇をこえた意図・計画におけるその要素として行われることが多い。すなわち、一般に建築において、そこに、あるまとまりのある空間を形成し、構成していくというようなことは第一義的なテーマとはならないものと考えられる。

建築群の構成においても、外部空間との関わりは、群としての建築の外観形成、および、主として建築相互の機能的関係から導かれ要請される群内部に取り込まれた外部空間の処理ということにとどまろう。そこに、快適な生活空間の形成という観点から、特定の構造物に限定されることなく、また、自然との連続を意図し、自然の構成要素を多用しながら、統一ある外部空間そのものの構成を図ることを一の主要な課題としようとする造園との大きな相違がみられる。

自然との関係では、造園が自然の中で、それとの連続において、自然の素材を多用し、自然本来の形姿やはたらきを生かし尊重した形で、積極的に組み込み、自然性あふれる快適な生活環境の形成・構成を図ろうとするのに対して、建築では、工学的素材を多用し、自然との遮断を図り、もって、その内部に合目的・人為的に制御される空間を形成し、また“自然”に対峙するものとしての“人間”意思的なものを表現していこうとする傾向が強い。なお、造園の場合、自然そのままに現れる美や機能それ自体に意義や価値をみ、その観照、利用のための供し方がテーマとなる場合も少くない。

審美性では、明治時代、官制用語の「造家」に対して、「建築」の術語の使用を主張した伊東忠太は、建築を、一定の芸術的様式をもつ建物一般をさす集合名詞、また、それをつくり出す建築技芸の体系であるとし、芸術性ということ強く期待した。芸術性という点で、建築は、自然や人体の模写から始まった他の多くの芸術とは対照的に、当初から抽象性の高いものとして出発している。その点で、自然の中に美を見出し、それを模写・模倣する、また自然的存在が素材としてのそれであって、純粹に表現のための手段としてその現実的意味が止揚されることなく、構造物や作品の中に、その所与性をどこまでも保ち続けている⁵⁾ 造園の場合とは好対照をなす。

また、建築は抽象芸術でありつつ、機能・実用ということと不可分に関わり、応用芸術としての性格も有している。造園においても、例えば観賞庭園等において、美それ自体が純粹に追究されることも稀でないが、機能が

前提にあり、それに媒介される等の形で、美の発現が期待されることが多い。なお、産業革命以降、芸術と工学技術とが分化してきたが、建築も例外ではなかった。²⁾

以上は、造園との対比を浮き彫りにする意図から、“建築学の原理・実態像”といったものを念頭におき、それとの関係で考察を行ったものである。なお、この“建築学像”は必ずしも現実の建築学の内容とそのままだ一致するものではないことを断っておきたい。

2-2 土木と造園

土木は住居のための基盤を整備し、採集や狩猟のための道を切り開き、橋を架けたりするところから始まっている。また農耕の開始とともに、灌漑や排水の施設を整備し、さらに権力の象徴としての大規模な墳墓なども造成するようになる。その後、築城、軍用道路の建設など軍事技術として発展していくが、他方、それらとは別に、橋、運河、治水、道路舗装など、市民生活や産業と密着した分野にもその成果が取り入れられ、18世紀半ば頃より、英国では、そのような土木技術に対して、civil engineering の用語があてられるようになっている。¹⁵⁾

土木の扱う対象は地上にあって静止していることでその機能を発揮するものが主で、橋とかトンネルなど人工の「構造物」と、その多数組み合わせによって新たな機能を生み出す「施設」が中心となる。そして、さらに、「施設」が種々組み合わせり、地域に固有な生活・生産環境がつくり出されていくことになる。

土木は、よく、“技術の中の技術”と称されるが、ここでは、課題は明確な形で与えられ、その実現のための技術が厳格に適用される。造園や建築の一部においては、人間の消費・休養面と密接に関係し、生活そのもの、また特にその奢侈面と関わるような場面も少なくなく、精神的で、複合的な機能が求められるのに対し、土木では生産面に、そして生活面でもその基盤形成に係わるような特定の要素と関係し、トータルな生活に関わるような場面が少なく、単一ないし限定された実用的な機能・効用が追求されることが多い。それゆえ、そこでは、人間的、自然的な、ある種の“遊び”といったような曖昧なものの介入する余地は小さくなっている。

そのため、土木では、墳墓などごく一部を除いて、建築のように、その外観によって、その存在性とか、精神的な何かを積極的に表現しようとすることも稀である。また、人間の生活全般に係わるような空間そのものの形成ということが積極的・意識的に意図されることも少ない。そして、そこに、審美性や芸術性ということが強く追求されることもない。そこに、内部空間にせよ外部空間にせよその空間形成を目指す、また、審美性や芸術性ということに重大な関心をもつ建築や造園との大きな相違がみられることになる。

自然との関わりでは、その機能発現に支障を来すような自然力の介入は、極力、排除されることになる。なお、土木施設等にあつては、外部環境との接触面の大きいものが多いが、そのことが、施設保護などの理由から、自然への遮断に対する一段と強い要請となつて現れることも考えられる。ただ、近年の自然環境の保全、生活環境整備、アメニティ志向の中で、自然の保全や審美性・アメニティへの配慮もなされつつある。とくに景勝地等では、自然景観との調和に留意されるようになっていく。

以上において考察の前提となつた“土木像”は、建築の場合と同様に、必ずしも、その実態のものとそのまま一致するものではない。なお、社会的な全般的な余裕の招来において、土木も快適で審美的な生活空間の構成、外部空間の構成ということに関心を抱きつつある。その場合、外部環境との接触面を多くもつ土木にあつて、従来の造園の活動の場とされているような領域への進出も十分に考えられるところである。

3. 造園をとりまく状況とその定義

3-1 造園学をとりまく状況

建築が人間の住む住居や、神や祖先をまつるための記念物をつくり、土木がその住居や記念物の立地のための基盤整備を行い、道や橋をつくることから始まっているのに対し、造園はその住居や記念物の外まわりの空間を整え、また人々の集會や交流に係わるオープンスペースを整備することから出発している。

人間が自然的諸個人として、原始共同態や共同体の成員として現れるような前近代の社会にあつては、その集団そのものにおける集會・居住のための原始共同態広場や、諸個人と集団との相互意思の媒介に係わるような共同体広場などの半自然のオープンスペースが各集落や都市の中心地等において広範に存在していた。

また、家族形態の明確化と共同体関係の形成とともに、“宅地および庭畑地”が“神聖な塙圃”によって囲い込まれ、諸個人の私的所有に供されるようになるが、そこでの住居まわりの空間は、自然からの不都合な要素・要因の侵入を緩衝・遮断し、好ましいものの導入を図るフィルターとしての機能を担い¹²⁾、しだいに住居機能を補完する庭園としての発展を遂げていくようになる。

また、そこは、共同態規制によって抑圧される個人的意思の発揚の場として、さらに自然力の圧倒する現実の中で、その補償としての自然に対する人間的意識の刻印・誇示に係わる場としての性格をもち、やがて他人の目や観賞を意識した造形対象ともなり、庭園としてのいっそうの機能付加と造形的な磨きがかかってくる。

近代に入ると、人間は非自然化され、その上に、すぐれて人為的、歴史的所産たる社会が形成され、その社会的生産過程を通して外的世界が獲得されるような自然支

配上の質的展開がなされる。近代では、人間も自然も全てのものが歴史の舞台に躍り出て、人間や社会によって創り出されるものとしての様相を呈することになる。

そして、人間の非自然化は人間相互間での、また人間と外的自然との間での自然的結合を失わせ、人々を孤独な存在にかえる。それは共同体広場の存立基盤の喪失を意味し、共同体広場を衰退させることになる。しかし、他方で、その過度の進展は、人々に反省的に、心理的な孤独感を癒し、社会的な連帯の形成のための、親しい交歓・交流に係わる空間の必要性についての認識を高めさせ、それを希求させるモメントとなっていく。

また、あらゆるものが人為的なものとして現れる現実にあつて、レクリエーションとしては、自然的なものが志向される。そして、そのレクリエーションは、労働における疎外の補償行為等として生まれたものであるが、時代の進展とともに、その意義・内容を膨らませ、発展させながら、しだいに隆盛をみていくことになる。¹²⁾

ところで、近代に特徴的な産業都市等の空間的現実とは、その生産空間としての性格をいよいよ強め、機能上・所有上、あるいは心理上の柵で囲い込み、人々がレクリエーション等において自由に利用できる部分を狭め、また、自然の要素を排除する等の過程をへて、全体として、自然の稀少化、人為化・稠密化を招来し、環境の快適性を低下させ、人々に生活空間としての疎外感を抱かせるものとなっている。今日では、それは、産業都市のみならず、都市全般に、そして、相当程度、農村についてもいえる事柄となっている。¹³⁾

このような状況、さらに厳しい環境・資源問題の招来の背景において、快適な生活空間の構成という観点から、稀少化した自然やオープンスペースの保全・整備ということが大きな課題となっている。そして、最近では、自然の保全や回復の旗手としての緑の意義が注目をあびるようになっていく。緑の保全・整備がそのまま、自然のそれを意味することにはならないが、そのための一つの具体的で有効な手段・方法となるものであり、それを核に、自然の保全を図り、また、それを膨らませていくことも、ある程度、可能のことになっているのである。¹⁴⁾

3-2 実態的な定義

造園の現状での主な活動内容を網羅し、しかもそれらを可及的に具体的かつ体系的に説明するものとしての造園学の定義としては、つぎのようなものが考えられよう。

“造園学とは、主として、緑を主体とする自然的要素ならびにオープンスペースの保全、整備、創出による構成を通じて、人間と自然および人々相互の触れ合いのための受け皿を整備し、また、外部空間構成における景観の秩序性、自然享受性、公共・社会性、安全・防災性、保健・衛生性、美観・風致性の向上を図り、

もって、潤いのある快適な生活環境の形成に資するための技術とその基礎を研究する学問である。”

まず、方法的・手法的な点では、1)主として、緑を主体とする自然的要素ならびにオープンスペースの保全、整備、創出による構成を通じて行うものであるとする。そこでは、オープンスペースを伴うものの他、狭義の緑化等、空間を伴わないものも含まれる。その操作し、取り扱うべき自然的要素では、実態上での比重の大きさを配慮し、緑の要素を主要なものとして例示している。

つぎに、造園の目的については、2)人間と自然および人々相互の触れ合いのための受け皿を整備すること、および、3)外部空間構成における景観の秩序性、自然享受性、公共・社会性、安全・防災性、保健・衛生性、美観・風致性の向上を図ることとしている。2)では、オープンスペースの設置等による整備が中心となり、3)では、一定の広がりをもつ外部空間における生活空間の構成・形成ということが、主に意図されている。そして、造園の目指すべき最終的な目標として、4)潤いのある快適な生活環境の形成ということが謳われている。

4. 造園における“自然性”“機能性”“快適性”

4-1 造園における“自然性”

自然性とは、事物における人為・人工の加わらないありのままの性状のことをいうが、ここで、“自然性”とは、そのような事物の性状を保全・維持するため、また、景観上、生態学上、等々において、それに似た疑似的な状況をつくり出すため、そのような事物を多用し、志向するような契機を指すものとする。

人間の、自然の風物景象に対して直接に反応する、感情を中心としその周囲に他の種々の精神的要素を包含する一つの全体としての内面状態は“自然感情”といわれるが、⁶⁾造園では、それが重視される。造園においては、この“自然感情”において、また自然との現実的な関わり・操作において、自然そのままの形姿やはたらきに対し、親和感を感じ(“自然親和性”)、尊重し(“自然尊重性”)、そのような自然の要素・要因に依存(“自然依存性”)する傾向が大きい。それゆえ、そこでは、絶対的・相対的に人間の手の加わり方の小さい、また、技術的・産業的な支配の度合いの低い自然、さらには、レクリエーション、景観、物質代謝等々において意義あるような自然とその自然力の発現¹³⁾ということに大きな関心が払われることになる。

ところで、近代文明や科学技術の基礎となった自然観は、自然を人間と完全に独立無縁な対立者として客観化し量的に分析・把握し、また、自然が実験等によって得られた知識によって徹底的に利用され支配されるべきであるという、自然支配の自然観といえる。そして、それは、今日の未曾有の環境破壊をみるまでもなく破綻を来しつ

つあることは明らかであろう。自然を生きた有機的システムとしてとらえ、人間もそのシステムの一員として調和的に共生していく存在としてみる自然観の構築・普及がまたれるが、¹⁴⁾“自然性”はそのような自然観において根底をなす考え方・態度であるといえることができる。

この“自然性”の契機は、フィジカルな計画設計・構成施工に係わる分野において、建築や土木に対して、造園を独自のものとして位置づけ、特徴づけるものとなっている。また造園においても、それは“機能性”や“快適性”の前提をなす重要な契機となっている。すなわち、造園の“機能性”や“快適性”は、自然そのままの形姿における素材の多用、自然の自立的な自然力発現の取り込みといった、“自然性”契機の上にはじめて成り立ち、また、考えられる事柄となっているのである。

造園の空間構成は、構成すべき対象地域において、好ましいと思われる要素・要因を含む地域を画し、自然等の要素・要因を“生捕る”ことから始まる。そして、不都合なものを排除し、そこにない必要なものを他所から導入し、必要な加工・造形をほどこし、人間の諸要求に応えるべき“第二の自然”に仕立てていくことになる。

この基盤的自然から“生捕られ”，人間によって再構成され理想化された“第二の自然”は、一方で、人間の要請になる、人間的要求を充たすべき半自然の装置であるが、他方で“生捕られる”という限りにおいて、大自然の、その構成部分として、大いなる自然力発現の一環として位置づけられ、組み込まれていくことになる。そして、その支援下におかれることにより、その自然としての生命維持が一定度、保証されることになる。それは、同時に、そこに大自然の野性も吹き込まれることになり、構成時に期待し意図された以外のものの発現もなされるようになる。こうして、人間の要求に応えるべく構成された“第二の自然”は、同時に、大自然の営みの“共鳴板”となり、また、その息吹や情報を伝える“アンテナ”として機能することになる。

ところで、人間の自然支配が大きくなり、その破壊が進む中で、人々は、この“アンテナ”から、その基盤となるべき自然において、健全な自然力の発現という点における異常な兆候を感じることになる。そして、自然における、その健全な自然力の発現という観点での自然の保全・回復ということが人類の深刻な課題となりつつある中で、造園は、その活動の前提となるべき、基盤的な自然の保全・回復ということをも、その活動の対象とせざるをえない状況におかれることになるのである。

4-2 造園における“機能性”

機能とは相互に関連し全体を構成する因子のもつ固有な役割、物のはたらき・作用のことをいうが、ここで、“機能性”とは、造園におけるその社会的な役割といっ

たものから、個々の作品等でのより具体的なものまで、各種の次元のものまでをもその射程範囲として考えていくものとする。さきにみた造園の定義における「快適性」も抽象的ではあるが、一種の機能といえ、外部空間構成における自然享受性、安全・防災性、保健・衛生性、美観・風致性の向上、また戸外レクリエーション、相互の触れ合いの発現等も、また機能と考えることができる。

造園において、「機能性」とは、土木の構造物や施設、あるいは一部の建築におけるような、厳格・明確なものではなく、ある幅をもったものであることが多い。それはまず、造園においては期待される機能が「自然依存性」「自然尊重性」の前提の上に実現されるものであることによっている。造園で求められる機能は、自然そのままの形態や自然の自立性の生かされたままに発現される範囲にとどまり、自然が人間に対する純粹の対象、有用性の範疇として、その質的性格が徹底的に剥奪されるまでにいたらない。そのため、その発現すべき機能の厳格化には自ずから限度がある。また、造園に期待される機能には、休養・娯楽を主体とする生活機能の充足といった内容のものが多く、その性質上、漠としていて、また特定のものに純化されず、多面的、多重的であったり、複合していたりする傾向の大きいものであったりすることが少なくないことなどの理由による。

ところで、人工的な構築密度が高くなく、諸機能の受容に柔軟な空間である造園空間では、ある特定の限定された用途や機能に特化されず、人々の自由なレクリエーション利用や、偶然的に、また将来的に起こるかも知れないような、意識されていない各種の効用の発現等に関して柔軟に対応・許容し、ときには相当な受け皿がないばかりに潜在的なままにおかれているような諸機能に対し、その顕在化を契機づけ誘発するようなはたらきが必要とされるが、それも造園空間における重要な「機能」ということができるのである。¹³⁾

そして、社会や事物の全てに現れる人為化の強化は、人間性の回復を図るレクリエーションにおいて、人間によって営められることの少ない、人間の匂いの希薄な自然が、人々の思惑などとは無関係に自然力を発揮する、そんな自然の自然性が希求されることが少なくない。¹⁴⁾すなわち、そこでは無垢な自然性の発現それ自体が一つの「機能」となっているのであり、「機能の否定における機能」ということが求められていることになる。

「機能性」と「自然性」との関係では、「機能性」はその期待される内容において、またその実現される程度において、「自然性」を前提とし、それに媒介されるものとなっている。その点で、「機能性」は「自然性」をはなれて自由に飛翔することは出来ない。「快適性」との関係では、「快適性」の追求が「機能性」の内容を構成し、また「機能性」の充足が「快適性」に寄与する等

の関係もみられるが、「快適性」の追求と「機能性」のそれとが衝突・矛盾する場合も考えられる。

4-3 造園における「快適性」

「快適性」とは、人々の対象感情において、「美しい」「好き」「楽しい」「気持ちがいい」というような快の感覚をもたらすような、環境や対象のもつ性質を意味するものである。造園では審美性や芸術性については関心がもたれてきたが、快については、あまり重要視されてこなかった。しかし、生活空間の豊かさは、いわゆる遠覚による高級な精神的なもののばかりでなく、生理的・肉体的、直接的な感覚によって支配される面も大きいこと、また造園は、例えば、微気象の調節等を通じて、それらに対しある程度、操作的に関与していくことのできる数少ない分野の一つであることなどから、美や芸術に限定されることなく、「快適性」全般について、その操作対象等として関わっていく必要があるものと考えられる。

ところで、この快は、感覚器官の生理的構造によって直接に規定されるため、潜在的には、人類に対して普遍的であるようにみえるが、その実、個人の、その時々、場面の現実的条件によって大きく左右され、きわめて偶然的・主観的な性格の強いものとなっている。そのため、公共的な空間構成、整備等において、「快適性」を積極的にうち出していこうとする場合には、実際には、各種の困難な問題の起こることも予想される。

この「快適性」において、大きな比重を占めるのは、やはり、美であろう。美は感性の刺激によって起こる精神的な快である。そのため、美は、精神的・間接的な娯楽・慰安であるともいわれる。そして、美は、快の中で最も非個人的で、客観的で普遍的である。それは、美が生理的、個人的ではなく、社会的に規定されているからである。その点で、美は社会的な快ともいえる。

美がいずれも感性を刺激し独自の精神的な快を成立させるところから、美学では広義の美たる「美的なるもの」の概念が措定される。この感性にふれる精神的価値たる広義の美は至るところでみられる。美は、その発現する対象の相違から「芸術美」と「自然美」とに分けられる。「芸術美」とは、芸術作品にみられる美であり、美的価値の創造という意図をもつ芸術家が、素材の形成加工をはたした成果として現れる。「自然美」とは所与の自然に現れる美である。両者には、美的体験、美的内容上での本質的な差異はない。すなわち、美は、「対象」そのものに付着する客観的的属性などではなく、その「対象」が人間の心に「触発」する特殊な「体験内容」ないしは「その対象について、我われの意識が主観的に生産する特殊な内容¹⁵⁾」であるからである。

さて、造園では、その扱う素材が自然そのままの、また、その主要なものが植物材料など生命のあるもので、

それ自身の生命の秩序・法則に従って成長を遂げるものであるため、人間の美的価値の創造の自由な飛翔が制約されることになるから^{3), 5)} 芸術とはなじみ難いジャンルであるといわれることがある。しかし、林³⁾も指摘するように、造園において、美的価値の創造といった観点から、単なる自然のひき写しではなく、自然素材の生命の秩序・法則を、人間のそれと重ね合わせ、より高次の秩序の中に組み込み、構成していくことによって、それを精神的なものとして獲得していくことが可能であり、そこに芸術性の成立ということが考えられることになる。

なお、芸術において、その模範を自然それ自体に求めようとする考え方も古来から多くみられるところである。すなわち、アリストテレスは「芸術とは自然を模倣することである」といい、ローマの文人セネカは「あらゆる芸術は自然の似姿である」と語っている。またレオナルド・ダ・ビンチは「鏡は肖像画の師匠である」という。近代画家の好んで用いる「ダブレ・ナチュレ」（自然によれ）も同様である。また、さらに進んで、ヨーロッパのロマン派の人々や、東洋の芸道思想の中には、自然のうちに一種の芸術意志を認め、人間の芸術をもその発現であるとし、芸術が自然に近づくほどより完成に近づくとする形而上学的な神秘思想もみられる。

つぎに、「自然美」は、「芸術美」以外の、広く一般にみられる美であり、特殊な自然存在である人間に固有に現れる人間美と、それ以外の自然にみられる狭義の“自然美”とがある。造園では、この“自然美”の観照が重要なテーマとなることが多い。“自然美”では、例えば、個物にみられる優美などが代表的なものとして挙げられるが、造園の美的表現・享受において、この優美はとくに重要な範疇となっている。また、個々の事物が連なり景物となると、例えば風景美などにおいては、荘厳、崇高などの美的範疇が重要となる。造園における風景の“生捕り”，景観構成においては、優美や荘厳、崇高などの表出がテーマとなることが少なくない。

諸契機の関係では、“快適性”と“自然性”とでは、“快適性”は、“自然性”が前提となり、自然の存在、自然力の発現により招来されるものとなっている。“機能性”との関係では、“機能性”の充足が“快適性”に寄与し、“快適性”の追求がそのまま“機能性”の内容

を構成することになるという好ましい関係がみられる場合もあるが、“快適性”の自由な飛翔が“機能性”の要請などのために制約されることも稀ではない。

5. おわりに

以上、造園学理解のための一つの試論を呈示したが、非常にラフなスケッチに終り、わずかにその足がかりが得られたにすぎない。本稿が造園学論議に一石を投ずることになることができれば、望外の喜びである。

＜主要な参考および引用文献＞

- 1) 江山正美（1972）：近代造園学の発生とその展開，東京農業大学農学集報，16（3，4），123－154
- 2) 福田晴度（1974）：建築学，大百科事典，5，平凡社，p. 166
- 3) 林　レイ子（1956）：庭園の芸術性について，造園雑誌，19（4），1－3
- 4) 金子九郎（1959）：造園の図式，同，23（2），6－10
- 5) 金子九郎（1968）：日本庭園試論，日本文化としての庭園，誠文堂新光社，106－120
- 6) 大西克礼（1948）：自然感情の類型，要書房，pp. 339
- 7) 大西克礼（1959）：芸術美と自然美，同著「美学」上，弘文社，139－185
- 8) 佐藤　昌（1964）：農学将来計画についての意見，造園雑誌，28（1，2），57－58
- 9) 高橋理喜男（1986）：造園の本質，高橋理喜男他著「造園学」，朝倉書店，1－6
- 10) 田中正大（1958）：「造園」の展開，造園雑誌，22（1），9－11
- 11) 上原敬二（1924）：造園学汎論，林泉社，pp. 465
- 12) 渡辺達三（1981）：造園空間から緑地空間へ～緑地の今日の性格の把握のために～，日本都市計画学会学術研究論文集，16，343－348
- 13) 渡辺達三（1983）：都市における公園の存立にかかわる意義契機について，同，18，97－102
- 14) 渡辺達三（1983）：都市と自然・緑，新都市，41（4），10－17
- 15) 八十島義之助（1985）：建築学，大百科事典，10，平凡社，968－969

Summary : This study is concened with the meaning and the structure of Landscape Architecture. The meaning of Landscape Architecture is as follows : Landscape Architecture is the science of organizing the natural elements such as greens and the open spaces so as to come into being the comfortable surroundings of human habitations by setting the saucer for outdoor recreation and social intercourse and improving the order of landscape, the enjoyfulness of nature and the spatial publicity, the safety, the healthfulness, and the scenic beauty. Landscape Architecture consists of 3 moments, such as “nature” “comfortableness” and “function”. And the each meaning of them is studied from the viewpoint of Landscape Architecture.